

障害のある若者たち

学び 就労 余暇

第9回

あたらしい自分に出会う —おしゃれをして自由になる

美容師 河村あゆみ

今月のテーマ

今回は「おしゃれ」に目を向けてみます。美容師として障害のある青年たちのおしゃれ教室にとりくむ河村あゆみさんは、おしゃれが日常になって、誰もが自由におしゃれをして余暇を楽しめるようにと願います。おしゃれ教室やファッションショーを通して変わっていく青年たちがいます。



私は美容師をしながら岐阜をはじめ、東京、愛知、大阪などにある福祉型専攻科や事業所で、障害のある青年たちに向けておしゃれ教室をおこなっています。おしゃれ教室では派手にメイクをするのではなく、バックやマッサージで自分の肌ふれてこちよさを体感したり、ワックスでスタイリングをして自分の変化を楽しんだり、時には参加者同士でハンドマッサージをしてお互いの肌ふれあうことも大切になっています。

おしゃれに消極的な仲間たち

はじめにみんなでおしゃれやヘアメイクについて情報交換をします。「お兄ちゃんはワックス使ってる」「お母さんはメイクしてるよ」「お姉ちゃんは化粧品たくさん持ってるよ」つぎつぎに家族の状況が出てきます。ここで、「私は」がないことに気がつきます。「作業所でメイク禁止だからできない」「メイクしたことないし」高校を卒業しても「校則守らないと先生に怒られる」…二十歳を超え、同世代であればおしゃれを自由に楽しむ世代でもあります。休日自由なはずですが、障害のある青年たちはなかなか自由におしゃれを楽しむ環境がなく、禁止されていると思いついてる人もいます。

おしゃれに消極的な理由もいくつか出てきます。「事業所で身だしなみを整えなさいと言われることが苦痛になり、次第に身だしなみを整えることに苦手意識をもち、おしゃれをすることも楽しめなくな

はじめてのパッティング



った」「周りに何を言われるかわからない」「人の視線が怖いから目立ちたくない」とおしゃれが自由にできない理由はそれぞれの心にマイナスイメージとして残っています。そのような仲間の気持ちも考慮しておしゃれ教室が始まります。

好きな子に見られる自分に期待

さまざまな事情を抱える仲間たちとおこなうおしゃれ教室では、無理にヘアメイクをすることはしません。参加の方法も近くで見ると、少し離れたところから参加するのもOK、ほかの仲間の様子を見ているだけでもOKです。参加者のおしゃれとの距離感をあえて大切にし、心の揺れを感じながらそれぞれのペースに合わせて進めていきます。

福祉型専攻科に通う奏太さんもおしゃれ教室の時は離れたところから参加していました。感覚過敏があり、ふれられることが苦手な奏太さん。時々私から「ワックスやってみる？」と聞いても首を振って体験することはありませんでした。おしゃれ教室を数回重ねたころ、変化していく仲間を意識するようになったのか、変身してかっこよくなった仲間を見てニヤツしていました。そのうち休み時間に奏太さんから話しかけてくれるようになり、距離も近くなってきたと感じました。

職員さんが「奏太さんがかっこよく変身したら莉子さんに写真見せてあげて。きつとかっこよくてびっくりするよ」と声をかけると、一気に表情が変わ

り「莉子ちゃんびっくりするかな？喜んでくれる？」と顔はニヤニヤ。「ワックスやってみる」とその場で寝癖を直し、ワックスでスタイリングをして写真撮影が始まりました。職員さんの声かけをきっかけに好きな子に見られる自分をイメージし、ワックスをつけてスタイリングすると、うれしそうに鏡をのぞき込む姿がありました。いつもの寝癖ヘアではない奏太さんは、仲間から「かっこいい」「いいね」という好意的な言葉を受け、自分に対する期待をふくらませているようでした。

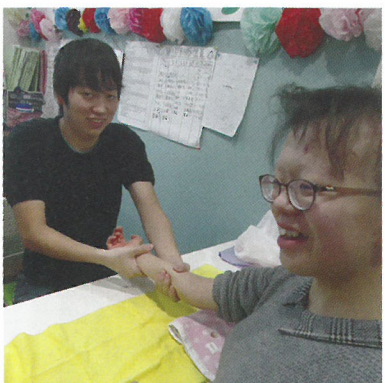
本人のタイミングに合わせて

おしゃれ教室は時間が限られているので、職員さんもつい「あなたも早くやってみてほしいよ」と本人の思いが付いてこないまま体験する形になることもあります。そんなときも、私は本人に「今やりたい？あとのの方が安心？」と確認しながら進め「やりたいけれどやれない思い」に寄り添うようにしています。休み時間や終わった後に心の準備ができて積極的になる仲間もいます。おしゃれをすることにも、いろんな事情で積極的になれない仲間たち。彼らの「やりたい」と思うタイミングを大切にしています。

イベントをきっかけにあたらしい自分に出会う

大阪の福祉型専攻科などが集まって開催される、おおさか学びの場交流会では、2019年からファ

仲間同士のハンドマッサージでリラックス



ファッションショー直前。
ドキドキしながらのメイク



舞台上ポーズ！



ファッションショーがおこなわれ、私はヘアメイクを担当しました。1回目のファッションショーでは企画する職員さんも試行錯誤のなか、仲間たちは好きな服でステージに立ち、歌やダンス、自己紹介などそれぞれが自己アピールをする場となりました。ファッションショー終了後の仲間たちへのインタビューで「服は誰が選びましたか？」と聞くと、彩華さんはニコニコの笑顔で堂々と大きな声で「おかあさん」と言うと、会場が笑いと拍手で包まれました。

このエピソードを後から職員さんと振り返りながら、普段着る洋服もお母さんが選んでいる人が多いという現状が見えてきました。ファッションショーをきっかけに、自分で選ぶことの楽しさを味わえたりいいこと、ひとりでは買えない物がむずかしいこと、服はたくさんありすぎて何を買っているのかわからないことなど、仲間たちの現状を話し合いました。

一年後、彩華さんの事業所でおしゃれ教室をすることになり、彩華さんと再会しました。彩華さんは私に会うとすぐ「今日の服はヘルパーさんと選びました」と、ヘルパーさんと服を買いに行ったエピソードを興奮気味に話してくれました。そして、数日後に控えていた「次回のファッションショーの服もお母さんにも相談したけど、自分で決めましたよ」と話し、その姿は一年前より大人っぽく感じました。2回目のファッションショー当日、ヘアメイクに入ると、彩華さんは「ファッションショーが終わってしまうことが悲しい。私たちはおしゃれを楽しむ

場がないんです。専攻科を卒業してもファッションショーに参加したいけど無理かな…」とねがいが溢れ出てきました。「卒業しても出演できるように、提案してみてもいいんじゃない」と話し、「最後にしたくないから言うだけ言ってみるね」と言って、彩華さんはステージに向かっていきました。



「おしゃれ」が日常になるように

一年間おしゃれ教室で学んだ仲間たちから「自分たちでファッションショーを企画したい」という思いが芽生えてきています。岐阜でも、ファッションショーの企画、テーマ設定、当日の衣装、ヘアメイク、メイクさんとの打ち合わせから障害のあるモデルさんと関係者と一緒にとりくみました。普段なかなか出会えないメイクさんとの出会いや、同世代の仲間で行く衣装選びも、「はじめて家族ではない人と買い物が出てうれしい」という感想もありました。支援者任せではない体験は、新しい自分を感じる体験にもつながると思います。

青年たちの心の変化に合わせながら、彼らが新しい自分を発見し「こんな自分もいいな」と思えるようなどりくみや仲間たちが企画するファッションショーを今後も仲間と一緒につくっていきたいです。そして、誰もが自由におしゃれをして余暇を楽しんだり、好きな人と出かけられるように：「おしゃれ」が特別な日のイベントから日常に変化していくことも期待しています。（かわむら あゆみ）